

# 特別支援教育における発達障害への実験的接近（４） －自閉症スペクトラム障害児における対人的空間－

企画者	平田正吾（茨城キリスト教大学）
	北 洋輔（国立精神・神経医療研究センター）
司会者	池田吉史（上越教育大学）
話題提供者	浅田晃佑（白鷗大学）
	北 洋輔（国立精神・神経医療研究センター）
指定討論者	奥村安寿子（国立精神・神経医療研究センター）
	鈴木浩太（国立精神・神経医療研究センター）
	江尻桂子（茨城キリスト教大学）

KEY WORDS: 特別支援教育, 発達障害, 実験

## 【企画趣旨】

本シンポジウムは、発達障害に対する理解と支援に向けて、実験的手法を用いることの意義や強み、問題点を改めて見直すことを目的としている。第4回目の本年度は、これまで意外なほど検討されてこなかった自閉症スペクトラム障害(ASD)における対人的空間の特徴について、異なる観点からの知見を扱う。各話題提供に対して、その方法論的課題を討論するのみならず、得られた知見の発展性や今後の方向性などの点まで深める機会としたい。

## 【話題提供者の趣旨】

### 1 自閉スペクトラム症者の社会性と身体性－パーソナルスペースとボディイメージの検討－（浅田 晃佑）

自閉スペクトラム症(ASD)は、人との関わりやコミュニケーションにおける困難さ及び行動や興味におけるこだわりにより診断される。これまで、ASD 者の特性に関して、他者理解(心の理論の能力)などの社会性の領域において、多く研究がなされてきた。しかし、感覚過敏・鈍麻などの身体感覚の領域にも最近注目が集まり、身体性の領域の研究の進展も求められている。

本発表では、社会性と身体性両方に関わると考えられるパーソナルスペースとボディイメージについての研究を紹介する。パーソナルスペースでは、距離停止法(stop-distance法)を用いて、ASD 者と定型発達者の快適な対人距離について調査した。6m 離れて調査者と参加者が向かい合い、調査者が参加者に近付く場合及び参加者が調査者に近付く場合でこれ以上近付かれるといやだと感じる距離を回答してもらった。その結果、どちらの場合でも、ASD 者が定型発達者よりも短い対人距離を取ることが分かった。続いて、ボディイメージでは、ASD 者と定型発達者に自身の身体幅(肩幅)について推測してもらい、実際の身体幅と比較した。その結果、実験手法により異なるものの、ASD 者の方が定型発達者に比べて身体幅の推測の正確性が低い(ASD 者の方が自身の肩幅の過大または過小評価をする)ことが分かった。以上の結果から、ASD 者は社会性と身体性の両方に関わると考えられるパーソナルスペースやボディイメージにおいて、定型発達者とは異なる特性を持っていることが示唆された。結果に基づき、ASD 者に合った療育支援・社会デザインを議論する。

### 2 ASD 児は友達や先生を見ていないのか（北 洋輔）

話しかけてくるときに驚くほど近づいてきたり、アイコンタクトが少ないと思ったら、逆にじっと見つめられるな

ど、ASD 児と関わった経験のある方は、一度は彼らの対人的空間に奇異さを感じたことはないだろうか。ASD 児・者の対人的空間は、しばしば対人距離として検討されてきたが、もう一つの構成要因として他者との向き合い関係(身体角度または対人角度)がある。私たちは ASD 児の対人角度に注目して、彼らの行動を実験的に検討してきたので、その一部を紹介する。

ASD 児の行動を俯瞰位置からモーションキャプチャーシステムで計測・評価したところ、彼らは他児との対人角度を 30°以内でとることがほとんど見られなかった。このことは対小児に限定しておらず、対成人でも同様のパターンが認められた。しかし、興味深いことに、ある特定の行動発現時には、健常児よりも ASD 児の方が対象となる相手を自分の中心角度に捉える時間(すなわち、相手の方を見る時間)が増加していた。これらから、①ASD 児は他者という社会的刺激に対する注意の諸機能が低下していること②適切に注意を向けても、社会的刺激の処理に時間を要することが示唆された。更に、これらの対人角度が教育的介入によって変動するかを合わせて検証した。継続的な介入の結果、他児を自分の中心角度に捉える時間そのものが延長するとともに、他児に働きかける前には、周辺角度から中心角度へと対人角度を変化させる(すなわち、相手の方を見ようとする)ことが認められた。対成人でも同様の変化が認められ、教育的介入によって、対人角度が変化することが示唆された。私たちは対人角度という“行動”の変化が、社会的刺激の処理という“認知”にどのように影響を及ぼすかを合わせて生理心理学的に検討している。この点も鑑みて、対人的空間を実験的に扱う意味と制約をフロアとともに議論できれば幸いである。

## 【指定討論の趣旨】

浅田氏の報告については、鈴木氏より行動指標を用いて検討することの利点、更には発達障害の子どもにも適応する際の工夫や限界について言及を頂く。北氏の報告については、奥村氏より小児を対象とした研究で行動指標から認知側面を検討する長短所と応用性について言及を頂く。江尻氏よりは、両者の報告と指定討論をふまえ、社会性の発達と運動発達の関係から対人的空間を検討することの意義について指摘を頂くとともに、発達障害の「子ども」を対象とする実験研究について俯瞰的な観点から教示を頂戴する。

(HIRATA Shogo, KITA Yosuke, IKEDA Yoshifumi, ASADA Kosuke, OKUMURA Yasuko, SUZUKI Kota, EJIRI Keiko)